

農作物技術情報 第5号 水稻

発行日 令和8年7月30日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用
二次元コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

病害虫発生予察情報 注意報 <https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/boujo/2012335.html>

○水稻 斑点米カメムシ類 対象地域：県下全域 発生量：多

水稻の生育に合わせ、穂揃期1週間後の薬剤防除を徹底しましょう。

- ◆ 県全体の出穂期は平年並の7月31日頃と見込まれます。
- ◆ 向こう1か月の平均気温は平年に比べ高くなる予報です。地域のかんがい水の状況に応じた水管理を徹底し、高温による登熟不良や玄米品質の低下を防ぎましょう。
- ◆ 斑点米カメムシ類の多発が予想されます。穂揃期1週間後の薬剤防除を徹底しましょう。
- ◆ 刈取り適期が大幅に早まる可能性があります。適期刈取りに向け、コンバインや乾燥調製施設の点検、整備を進めましょう。

1 水稻の生育状況と出穂期・成熟期の予測

- ・ 農業改良普及センター生育診断予察ほの幼穂形成期は県全体で7月9日頃（平年差+1日）となっています。県全体の出穂期は平年並の7月31日頃、成熟期（刈取り適期）は9月12日頃と見込まれます（表1）。
- ・ なお、向こう1か月の平均気温は平年に比べ高くなる予報※であることから、県全体の成熟期（刈取り適期）は9月4日頃（平年差-7日）と大幅に早まる可能性があります※※（表2）。

※ 東北地方1か月予報（令和8年7月23日発表，仙台管区气象台）より。

※※ 市町村ごとの出穂状況から予測した刈取り適期に関するより詳細な情報は、次号掲載予定。

表1 出穂期・成熟期の予測（平年±0℃、農業改良普及センター生育診断予察ほ）

地帯・品種名	幼穂形成期			出穂期（平年±0℃）			[参考R7] 出穂期	成熟期（平年±0℃）			[参考R7] 成熟期
	本年 (月/日)	平年 (月/日)	平年差 (日)	本年 (月/日)	平年 (月/日)	平年差 (日)		本年 (月/日)	平年 (月/日)	平年差 (日)	
北上川上流	7/12	7/10	+2	8/3	7/31	+3	7/28	9/16	9/12	+4	9/7
北上川下流	7/8	7/7	+1	7/30	7/31	-1	7/29	9/10	9/11	-1	9/6
東 部	7/12	7/8	+4	8/3	7/28	+6	7/23	9/15	9/5	+10	8/31
北 部	7/11	7/5	+6	8/3	7/30	+4	7/26	9/18	9/12	+6	9/6
県 全 体	7/9	7/8	+1	7/31	7/31	±0	7/29	9/12	9/11	+1	9/6
ひとめぼれ	7/11	7/10	+1	7/31	8/1	-1	7/31	9/11	9/11	±0	9/7
あきたこまち	7/13	7/11	+2	8/2	7/31	+2	7/28	9/16	9/12	+4	9/7
いわてっこ	7/10	7/8	+2	8/2	7/31	+2	7/27	9/17	9/13	+4	9/7
白銀のひかり	7/8	7/4	+4	8/1	7/25	+7	7/25	9/14	9/5	+9	9/5
銀河のしずく	7/10	7/6	+4	8/1	7/29	+3	7/25	9/13	9/7	+6	9/2
金色の風	7/10	7/9	+1	8/1	8/1	±0	8/2	9/11	9/11	±0	9/8

1) 出穂期：幼穂形成期の令和7年の実測値から、発育指数（DVI）とアメダス日平均気温を用いた予測式により推定。

⇒日平均気温は予測日（7/26）より前の期間は現況値、予測日以降は平年値を使用。白銀のひかりはいわてっこの予測式を代用。
（±0℃は予測日以降の気温を平年値で予測した値）

2) 成熟期：推定した出穂期の翌日を起算日とし、日平均気温を積算して950℃となる日。

（±0℃は予測日以降の気温を平年値で予測した値）

3) 県全体の数字は、各地帯の作付面積比による加重平均。

4) 平年値は、原則、令和3年から令和7年までの5か年平均値。

表2 出穂期・成熟期の予測（平年+4℃、農業改良普及センター生育診断予察ほ）

地帯・品種名	幼穂形成期			出穂期（平年+4℃）			〔参考R7〕 出穂期 （月/日）	成熟期（平年+4℃）			〔参考R7〕 成熟期 （月/日）
	本年	平年	平年差	本年	平年	平年差		本年	平年	平年差	
	（月/日）	（月/日）	（日）	（月/日）	（月/日）	（日）		（月/日）	（月/日）	（日）	
北上川上流	7/12	7/10	+2	8/2	7/31	+2	7/28	9/8	9/12	-4	9/7
北上川下流	7/8	7/7	+1	7/29	7/31	-2	7/29	9/3	9/11	-8	9/6
東部	7/12	7/8	+4	8/2	7/28	+5	7/23	9/8	9/5	+3	8/31
北部	7/11	7/5	+6	8/2	7/30	+3	7/26	9/9	9/12	-3	9/6
県全体	7/9	7/8	+1	7/31	7/31	±0	7/29	9/4	9/11	-7	9/6
ひとめぼれ	7/11	7/10	+1	7/30	8/1	-2	7/31	9/4	9/11	-7	9/7
あきたこまち	7/13	7/11	+2	8/2	7/31	+2	7/28	9/8	9/12	-4	9/7
いわてっこ	7/10	7/8	+2	8/1	7/31	+1	7/27	9/8	9/13	-5	9/7
白銀のひかり	7/8	7/4	+4	7/31	7/25	+6	7/25	9/6	9/5	+1	9/5
銀河のしずく	7/10	7/6	+4	8/1	7/29	+3	7/25	9/6	9/7	-1	9/2
金色の風	7/10	7/9	+1	7/31	8/1	-1	8/2	9/3	9/11	-8	9/8

- 1) 出穂期：幼穂形成期の令和7年の実測値から、発育指数（DVI）とアメダス日平均気温を用いた予測式により推定。
⇒日平均気温は予測日（7/26）より前の期間は現況値、予測日以降は平年値を使用。白銀のひかりはいわてっこの予測式を代用。
（+4℃は平年値より気温が4℃高く推移した場合の予測値）
- 2) 成熟期：推定した出穂期の翌日を起算日とし、日平均気温を積算して950℃となる日。
（+4℃は平年値より気温が4℃高く推移した場合の予測値）
- 3) 県全体の数字は、各地帯の作付面積比による加重平均。
- 4) 平年値は、原則、令和3年から令和7年までの5か年平均値。

2 登熟を低下させない水管理（少雨・渇水対策）

（1）出穂・開花期の水管理

この時期は、生育の速度が早く大量の水を必要とします。過乾燥は、穂の出すくみや開花・受精障害による不稔の発生を招くことがあるため、浅水による湛水管理を基本とします。

暗きよや排水口を閉じ、田面が露出しないように管理しましょう。

（2）登熟期の水管理

登熟前半は平年に比べかなり高温で推移することが予想され、玄米品質の低下（胴割粒や白未熟粒の発生）が懸念されます。

そこで、玄米品質の低下や登熟不良を防ぐために、地域のかんがい水の状況に応じた水管理を徹底してください。

なお、限りある用水を有効に活用するため、かけ流しかんがいの実施は控えるとともに、地域全体に水が行きわたるよう、節水に努めましょう。

① 十分なかんがい水を確保できない場合（少雨・渇水対策）

- ・ 取水制限などによりかんがい水が不足する場合は、間断かんがいを実施せず、土壌を常に湿潤状態（足跡に水が少したまる程度の状態）に保ちます（図1）。
- ・ 土壌の乾燥は品質低下につながるため、実施には十分に注意してください。
（水持ちの悪い圃場などは特に注意）



図1 足跡に水が少したまる程度の状態

② かんがい水を確保できる場合

- ・ 間断かんがいを基本とし、水の入替頻度を高めて、水温・地温を下げるとともに、根に酸素を与えて活力維持をはかります。

【管理の目安】

湛水：2～3日（水深は3cm程度まで）

落水：1～2日（水たまりが消え、湿り気を目や手で触れて確認できる程度まで）

- ・ 入水は夜間に行います（水尻を止めて夕方から朝まで入水→その後、自然減水）。
- ・ 常時湛水管理は、根腐れや稲体の消耗をまねき、スムーズな登熟を阻害するので避けてください。

（3） 落水時期

- ・ 落水時期の目安は、排水良好な水田で出穂後35～40日、排水不良田で30～35日です。
- ・ 高温で登熟が早まる場合は、落水時期を早め、適期刈取りに備えてください。
- ・ 極端な早期落水は腹白粒増加や千粒重低下、胴割粒発生の原因となるので避けましょう。

3 病虫害防除対策

（1） 斑点米カメムシ類・・・発生量「多」の予報

〔令和8年度病虫害発生予察情報 注意報第4号（県病虫害防除所 令和8年7月28日発行）〕

ア 薬剤防除（茎葉散布で行う場合）

地域一斉防除を行う場合の散布時期は、地域の圃場の半数が**穂揃期**に達してから**1週間後**を目安とします。



図2 出穂の様子



図3 穂揃期（ひとめぼれ）

※8～9割の茎で出穂、穂首はまだ完全抽出していない

- ・ 穂の先端（芒を除く）が少しでも抽出した状態を“出穂”といいます（図2）。
- ・ 出穂した茎の割合が40～50%の状態を「出穂期」、80～90%の状態を「穂揃期」（図3）といいます。

イ 被害多発の恐れがある場合

下記①②③の場合は、**穂揃期2週間後に薬剤を追加散布**します。

〔穂揃期1週間後にジノテフラン剤を用いた場合、追加散布は穂揃期3週間後〕

- ① 近隣に出穂開花中のイネ科植物（特にイタリアンライグラス）を含んだ牧草地や雑草の繁茂地等があり、斑点米カメムシ類の発生密度が高いほ場。
- ② 本田内にノビエ、イヌホタルイ、シズイなどの雑草が多発しているほ場。
- ③ 割れ粳の出やすい品種（あきたこまち等）を作付けしているほ場。



図4 シズイの花穂とアカスジカスミカメ成虫



図5 割れ粃と斑点米（矢印）

ウ 畦畔の草刈り

水稻出穂間際の草刈りは、カメムシを本田に追い込むので避けます。

なお、草刈りを適期（水稻出穂15～10日前まで）に実施できなかった場合は、本田の薬剤散布（穂揃期1週間後）の後、1週間以内に草刈りしてください。

（2） 穂いもち・・・発生量「やや少」の予報

〔令和8年度病害虫発生予察情報 発生予報第5号（県病害虫防除所 令和8年7月30日発行）〕

ア 基本防除

出穂前の予防粒剤の施用、または出穂直前と穂揃期の2回の茎葉散布を基本とします。

イ 穂いもちの発生が多いと予想される場合

- ・ 出穂後に降雨が続く場合や、低温等で出穂期間が長引く場合は、出穂直前から穂揃期1週間後まで、7～10日間隔で茎葉散布による防除を実施します。
- ・ 葉いもちが上位葉で多発している場合は、確認時に直ちに防除を開始し、穂揃期1週間後まで7～10日間隔で茎葉散布による防除を実施します。



図6 葉いもち病斑（左：急性型、右：慢性型）

（3） 紋枯病・・・発生量「やや多」の予報

〔令和8年度病害虫発生予察情報 発生予報第5号（県病害虫防除所 令和8年7月30日発行）〕

茎葉散布による防除は、穂ばらみ末期（7月末～8月上旬）に、畦畔際の発病株の割合（発病株率）が、早生品種で15%以上、晩生品種20%以上の場合に行います。

農薬の安全使用

- ・ 農薬は使用前に必ずラベルを確認し、使用者が責任をもって使用してください。
- ・ 他の作物に農薬が飛散しないよう注意して散布してください。
- ・ 養蜂（ミツバチ）への配慮
養蜂活動が行われている地域で殺虫剤を散布する場合は、養蜂家と協議の上、散布時期を事前に通知するなど、ミツバチへの危被害防止を徹底してください。

4 適期刈取りに向けた準備

- ・ 向こう 1 か月の平均気温は平年に比べ高くなる予報であることから、県全体の刈取り適期は大幅に早まる可能性があります（表 1）。
- ・ 近年は高温登熟と刈遅れを原因とした胴割粒や白未熟粒の発生などによる品質低下が問題となっています。
- ・ 適期刈取りに向けて、早い段階から、コンバインや乾燥調製施設の点検・整備を進めましょう。また、今後の気象経過や長期予報に注意しながら、積算温度等の目安（表 2）を参考に、品種や圃場ごとに刈取り時期の見通しを立てましょう。

表 2 刈取り適期の目安（出穂後の日平均気温の積算）

品種名	積算気温（℃）
ひとめぼれ	900～1,050
あきたこまち	950～1,050
いわてっこ	950～1,050
白銀のひかり	950～1,050
銀河のしずく	950～1,050
金色の風	950～1,050

ツキノワグマの出没に関する警報

県は、ツキノワグマの出没に関する一層の注意を促し、更なる被害の防止を図るため、県内全域に「ツキノワグマの出没に関する警報」を発表します。県民の皆さんにはツキノワグマの被害を防止するため、一層の注意をお願いします。

<https://www.pref.iwate.jp/kurashikankyoushizen/yasei/1049881/1043255.html>

1 クマに遭遇しないために

- ・ 事前に入山地域の出没情報や被害情報を確認する。
- ・ 音の鳴るグッズを常に鳴らして存在をアピール

2 クマを寄せ付けない

- ・ 食べ残し等、エサになるものを放置しない
- ・ 農地周辺のやぶを刈り払い、見通しの良い環境を整備する。

3 出会ったときの行動

- ・ 背を向けて走って逃げない
- ・ 目を離さず静かにゆっくり後ずさる

4 襲われそうになったら...

- ・ クマが攻撃してきたら両腕で顔や頭をカバーし地面に伏せて防御する

次号は8月27日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

熱中症
防止

- 日中の気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等作業時間の工夫を行うこと。水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給すること。気温が著しく高くなりやすいハウス等の施設内での作業中については、特に注意。
- 帽子の着用や、汗を発散しやすい服装をすること。作業場所には日よけを設ける等できるだけ日陰で作業するように努めること。
- 暑い環境で体調不良の症状がみられたら、すぐに作業を中断するとともに、涼しい環境へ避難し、水分や塩分を補給すること。意識がない場合や自力で水が飲めない場合、応急処置を行っても良くならない場合は、直ちに病院で手当を受けること。

**6月1日～8月31日は
農薬危害防止運動期間です**

- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬の保管・管理は適切にしましょう

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。

農作物技術情報 第5号 畑作物

発行日 令和8年7月30日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用
二次元コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ **大豆** 開花期以降は、干ばつ時にはかん水を行いましょう。
また、ほ場の様子を確認し、病虫害防除を適切に行いましょう。
集中豪雨や台風に備え、明渠や排水溝等の点検整備を行いましょう。

- ◆ **小麦** 次期作に向け、排水対策等のほ場準備を開始しましょう。

大豆

1 生育概況

生育は全般的に順調です。一方で、7月下旬の降雨の影響により、一部のほ場では滞水が見られています。ほ場表面に滞水があると湿害の原因となりますので、排水を促します。

2 今後のほ場管理

(1) 開花期以降の水管理（高温・少雨対策）

ア 暗渠の閉栓

高温・少雨が予想されているため、大豆ほ場の土壌水分を適正に維持することを目的に、晴天が続く場合は暗渠を閉栓するなど、土壌水分の保持に努めてください。

イ うね間かん水

開花期以降は水分要求量が大きくなり、乾燥が続くと減収することもあります。下記URLに掲載している「大豆の開花期以降のかん水要否判定シート」を参考に、明渠やうね間を利用したかん水の実施について検討してください。

大豆の開花期以降のかん水要否判定シート

https://www.pref.iwate.jp/agri/_res/projects/project_agri/_page/_002/011/924/daizu_kansui_hannteisi-to.pdf

(ア) かん水実施の目安

- ・ 日中に上位葉が立ち、葉裏が目立つ。
- ・ 晴天が1週間程度続く。
- ・ 土壌表面が白く乾燥している。

(イ) かん水を実施出来る条件

- ・ 畦間通水ができる。（畦が立っている・滞水しない）
- ・ 漏水が小さい。
- ・ 排水溝が整備されている。

(ウ) 具体的な方法

- ・ 朝夕の涼しい時間帯に実施する。
- ・ 畦間に通水後は速やかに排水する。
- ・ 大区画ほ場では数日（概ね3日間程度）に分けて実施する。

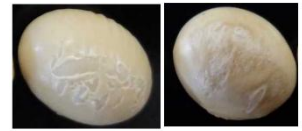


写真1 乾燥が続き、葉が立った様子
（ほ場全体が白っぽく見えている）

※地域によっては、農業用水の供給制限が行われているところがありますので、各地域の情報を確認してください。

【令和5年産大豆の障害粒（「英ずれ粒」等）の発生について】

令和5年産大豆では、不定形裂皮粒や英ずれ粒（リング状または帯状に淡褐色～褐色の着色及び皮切れが見られる粒）といった障害粒の発生が多く、県中南部を中心に発生が目立ちました。英ずれ粒の発生機構は解明されていませんが、主に子実肥大期の早い時期における高温・干ばつといった気象条件が影響していると考えられています。



裂皮粒
(不定形裂皮) 「英ずれ」粒

(2) 排水対策

集中豪雨による冠水・浸水被害や湿害を避けるため、畦溝と排水溝を連結するとともに、明渠や水尻にゴミなどの詰まりや崩れがないか確認します。また、排水口（フリードレン下部）の高さを確認し、ほ場内排水を促すようしっかり掘り下げてください。

3 病害虫防除

(1) ウコンノメイガ

ア 防除の目安

7月第6半旬に1茎あたりの葉巻が3個以上見られる場合は防除が必要です。8月5日頃までに薬剤防除を実施してください。

イ 発生の特徴

ウコンノメイガの成虫は葉の裏に産卵し、ふ化幼虫が葉を巻いて加害します。

ほ場をよく観察し、多発の徴候がみられたら、直ちに防除を行います。また、ウコンノメイガは、葉色の濃い品種や生育が旺盛なほ場で多発する傾向がありますので、重点的に観察してください。



写真2 ウコンノメイガ若齢幼虫による食害（葉巻）

(2) マメシンクイガ

ア 薬剤防除の適期（表1）

【県央、県南地域】

有機リン剤：9月第1半旬

合成ピレスロイド剤：8月第6半旬

ジアミド剤：8月第4半旬から第6半旬

【県北地域】

有機リン剤：8月第6半旬

合成ピレスロイド剤：8月第5半旬

ジアミド剤：8月第3半旬から第5半旬

イ 耕種的防除

連作を繰り返すと被害が多くなります。

水稲との輪作を実施して、発生密度の低減に努めてください。

ウ 発生の特徴

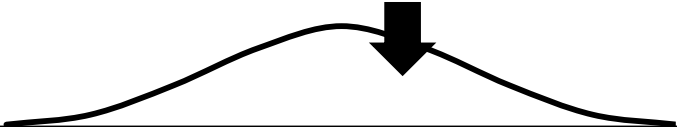
マメシンクイガは日長に反応して羽化するため、毎年同じ時期に発生します。

8～9月に羽化した成虫が、大豆の莢に1粒ずつ産卵し、ふ化幼虫が子実を食害して、収量・品質を低下させます。



写真3 マメシンクイガ幼虫による子実の食害

表1 各薬剤の最も防除効果が得られる時期（県央・県南地域）

系統名	8月						9月			
	半月	2	3	4	5	6	1	2	3	4
有機リン剤							◎	○		
合成ピレスロイド剤					○	◎	○			
ジアミド剤				◎	◎	◎	○			
マメシクイガ発生消長（北上） —：成虫 ↓：産卵盛期（推測）										

防除強化の評価 ◎：最も効果のある防除時期 ○：効果のある防除時期

※県北地域は、産卵盛期、防除適期ともに各々1半月早まります。

平成26年度岩手県農業研究センター試験研究成果書「大豆害虫マメシクイガに対する各薬剤の防除適期」より

（3）紫斑病

8月下旬以降で気温が20℃付近にあり、降雨が続いた場合に感染します。若莢期～子実肥大期に薬剤が莢によく付着するよう散布することが防除のポイントです。

ア 防除適期

- ・1回防除の場合：開花期から25～35日後の間
- ・2回防除の場合：若莢期（開花期20日後頃）～子実肥大期（開花期40日後頃）の間に2回散布（散布間隔は10日程度）

QoI 剤は防除効果の低下事例が報告されています。

使用する場合は、別な系統の薬剤との組み合わせの2回防除を実施してください。

イ マメシクイガとの同時防除の注意点

マメシクイガの防除時期は年次変動が比較的小さいのに対し、紫斑病の防除適期である若莢期～子実肥大期は、大豆の生育状況や天候などの影響で変動することがあります。このため、マメシクイガの防除適期と紫斑病の防除適期が重なるかを確認し、薬剤の特徴などを総合的に勘案した上で防除時期や薬剤などを決定してください。

ウ 耐性菌発生防止

QoI 剤、DMI 剤、ピリダジン類は、耐性菌の発生リスクが高いため、2～3年に1回の使用にとどめてください。



写真4 紫斑粒



写真5 紫斑病罹病株

小麦

1 令和8年産の振り返り

【令和8年産の特徴】

R8年産小麦は、播種時の長雨による湿害により生育不良になったほ場や播種できなかったほ場が見られました。

一方で、排水の良好なほ場は、例年より収量が高かった事例もありました。

【令和9年産への重点事項】

排水対策などの播種前のほ場準備を万全に行い、秋の天候に左右されないほ場を作りましょう。

2 小麦作付予定ほ場における水稻収穫後の管理

水稻後の小麦作では、連作ほ場とは異なり、作業期間の制約などから土壌改良資材や堆肥等の施用が難しくなります。長期的な土壌改良計画を策定し、ローテーションの中で土壌改良・地力向上に取り組んでください。

また、水稻収穫後、スムーズに播種が行えるよう、速やかに溝掘り（額縁明渠）等の排水対策を実施します。なお、連作ほ場あるいは固定転作ほ場でも排水対策は必須です。

(1) 排水対策の基本

明渠の施工を行うほか、確実に排水できるよう明渠と排水口を接続します。(図)

(2) 雑草対策

畦畔や明渠の雑草対策（非選択性除草剤の散布）を行い、ほ場内部への雑草の侵入を防ぎます。



写真6 排水口まで掘り下げ明渠と接続する

3 小麦連作ほ場のほ場準備

小麦連作ほ場では、水稻作付後のほ場に比べ、ほ場準備の期間を確保できるので、**万全な準備**を行います。

(1) 排水対策の実施

連作ほ場においても、コンバインやトラクタの走行によりほ場の排水性が低下していることがあります。明渠や弾丸暗渠を早めに行い、**乾きやすいほ場**を作ります。

(2) 雑草対策

連作ほ場では、イネ科雑草などの麦作における難防除雑草が発生することが多いです。**非選択性除草剤の散布**や**耕起**により雑草防除を行います。**耕起**を行う際は、ロータリー耕よりも**プラウ耕**の方が雑草種子を下層にすき込むことができるので効果的です。

(3) 土壌改良

一般に連作ほ場では連作年数に比例して地力が低下します。特に固定転作ほ場では石灰や苦土が減少し、低pH化が進んでいるほ場が目立ちます。**石灰資材などの投入**に加え、堆肥の投入や緑肥を利用するなど、**積極的な土づくり**を行います。

4 次年度に向けたかび毒汚染の防止・低減のために

(1) 品種の選択

本県の奨励品種から、赤かび病抵抗性が比較的強い品種を選択します。

(2) ほ場の選択

排水性の良いほ場を選択するほか、前作作物の影響を考慮します。

ア 赤かび病の感染源

赤かび病の伝染源は、土壌表面の作物残さに形成される「子のう殻」です。この「子のう殻」に詰まっている「孢子」が飛散して、麦類の穂に感染します。

赤かび病菌は幅広い作物残さから確認されますが、特にイネ科作物の「トウモロコシ、イネ、麦類」やイネ科雑草に多く寄生しています。

イ 残さの処理

・輪作

連作により発生リスクが高まりますので、麦類の連作を避け、水稻や他品目との輪作をします。

・残さの処理

前作の作物残さ（稲わらや稲株、こぼれ麦等）を早めに土壌中にすき込んだり、ほ場外へ持ち出して地表面に残さないことにより、赤かび病菌の密度を低下させます。

プラウ耕の実施（前作がトウモロコシでは必須）、またはアップカットロータリーや低速度の耕起を行い、確実なすき込みを実施します。



写真7 稲残さの地際部に形成された子うの殻



写真8 写真7の拡大図

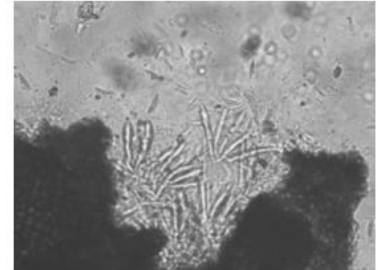


写真9 子うの殻内の子うのと子うの胞子

ツキノワグマの出没に関する警報

県は、ツキノワグマの出没に関する一層の注意を促し、更なる被害の防止を図るため、県内全域に「ツキノワグマの出没に関する警報」を発表します。県民の皆さんにはツキノワグマの被害を防止するため、一層の注意をお願いします。

<https://www.pref.iwate.jp/kurashikankyou/shizen/yasei/1049881/1043255.html>

- 1 クマに遭遇しないために
 - ・ 事前に入山地域の出没情報や被害情報を確認する。
 - ・ 音の鳴るグッズを常に鳴らして存在をアピール
- 2 クマを寄せ付けない
 - ・ 食べ残し等、エサになるものを放置しない
 - ・ 農地周辺のやぶを刈り払い、見通しの良い環境を整備する。
- 3 出会ったときの行動
 - ・ 背を向けて走って逃げない
 - ・ 目を離さず静かにゆっくり後ずさる
- 4 襲われそうになったら...
 - ・ クマが攻撃してきたら両腕で顔や頭をカバーし地面に伏せて防御する

次号は8月27日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

熱中症防止

- 日中の気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等作業時間の工夫を行うこと。水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給すること。気温が著しく高くなりやすいハウス等の施設内での作業中については、特に注意。
- 帽子の着用や、汗を発散しやすい服装をすること。作業場所には日よけを設ける等できるだけ日陰で作業するように努めること。
- 暑い環境で体調不良の症状がみられたら、すぐに作業を中断するとともに、涼しい環境へ避難し、水分や塩分を補給すること。意識がない場合や自力で水が飲めない場合、応急処置を行っても良くならない場合は、直ちに病院で手当を受けること。

**6月1日～8月31日は
農薬危害防止運動期間です**

- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬の保管・管理は適切にしましょう

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。

農作物技術情報 第5号 野菜

発行日 令和8年7月30日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用
二次元コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ 共 通 換気や遮光等の高温対策とこまめなかん水管理を行いましょう。水分補給と休憩をとり熱中症にならないよう気をつけましょう。
- ◆ 果菜類【施設】 高温対策、草勢維持、病虫害防除を徹底しましょう。
- ◆ 果菜類【露地】 適切な整枝・摘葉と草勢維持、病虫害防除を徹底しましょう。
- ◆ 葉 茎 菜 類 雨よけほうれんそうは、天候の変化に対応した遮光管理と適切なかん水管理・病虫害防除を徹底しましょう。露地葉茎菜類は、適期作業・病虫害防除を徹底しましょう。

1 生育概況

（1）果菜類【施設】

- ・ きゅうりは、半促成や早熟作型が概ね収穫終盤～終了となっています。長期どり作型の生育は概ね平年並みとなっています。病虫害では、褐斑病、アブラムシ類、アザミウマ類、ハダニ類の発生が見られています。
- ・ トマトの生育は、収穫により着果負担が軽減され生育は概ね平年並みですが、日照不足によりやや軟弱徒長の地域が見られています。病虫害では、灰色かび病、アザミウマ類やコナジラミ類、オオタバコガ、トマトキバガが散見されています。
- ・ ピーマンの生育は、概ね平年並みですが、日照不足により主枝の伸長が緩慢な地域が見られます。病虫害では、斑点病、アザミウマ類、アブラムシ類、タバコガ類の発生が見られています。

（2）果菜類【露地】

- ・ きゅうりの生育は、概ね順調ですが、生育初期の影響により一部で果形の乱れなどが見られています。病虫害ではべと病や炭疽病、褐斑病、アザミウマ、タバコガ類等が散見されています。
- ・ ピーマンの生育は、日照不足による影響が見られるものの生育は概ね平年並みとなっています。病虫害では灰色かび病、斑点病、アザミウマ類、タバコガ類の発生が見られているほか、一部地域でウイルス病（CMV）が見られています。

（3）葉茎菜類

- ・ 雨よけほうれんそうの生育は、高温の影響により株がやや細く一部で葉先枯れ等が発生しています。病虫害は、萎凋病等の土壌病害、アブラムシ類、アザミウマ類等が発生しています。
- ・ 高冷地キャベツ・レタスの生育は、乾燥後の降雨により生育が進み複数の作型の収穫期となっています。病虫害は、キャベツはウワバ類、オオタバコガの発生が多く、コナガも発生しています。レタスではすそ枯病の発生が見られています。
- ・ ねぎの生育は概ね順調ですが、一部で葉先枯れ等が発生しています。病虫害ではべと病やネギハモグリバエ、ネギアザミウマの発生が見られます。

2 技術対策

(1) 共通

農作物病虫害発生速報 <https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/boujo/2012336.html>

- ・ オオタバコガのフェロモントラップへの誘殺数が急増しています。
- ・ 早期発見に努め、効果のある薬剤を散布しましょう。
- ・ 詳しくは、令和8年7月30日付け「農作物病虫害発生速報 No 7」を御参照下さい。

(2) 果菜類【施設】の管理

施設では、換気や遮光・遮熱等の高温対策を徹底します。かん水と追肥は少量多回数とし、日射量に合わせて回数を調整します。特に曇雨天後の晴天では、生長点の萎れや障害果の発生につながるため、天候に合わせたこまめな管理を行ってください。また、健全な葉を繁茂させ、葉の蒸散による気化潜熱でハウス内気温の上昇を抑制します。

ア きゅうり

- ・ 長期どり作型では、古い葉を摘葉し側枝から発生する健全葉への切り替えにより、過繁茂による病虫害の発生を防ぎます。
- ・ 抑制作型では、育苗や定植が高温期のため、徒長や日焼け、乾燥対策のための遮光を徹底します。特に生育初期は茎葉の蒸散量が少なくハウス内の気温が高温になりやすいため、遮光に加えて、こまめなかん水を行います。

イ トマト

- ・ 高温や強日射により、生長点の萎れや落花、日焼け果等が発生しやすいことから、高温対策を徹底します。
- ・ 摘葉は、収穫後の花房下の葉を摘み、風通しを良好にします。
- ・ 着果促進のためのホルモン処理は障害果の発生を避けるため、涼しい時間帯に行います。
- ・ 障害果等は早めに除去し、着果負担を軽減します。
- ・ 葉かび病の抵抗性品種でも、葉かび病が発生する場合があります。また、すすかび病が発生するので、定期的に防除を行ってください。なお、萎凋性病害も増加する時期なので、萎れが発生した場合は、最寄りの指導機関に診断を依頼し、原因を特定して対策を講じてください。

ウ ピーマン

- ・ 収穫の終わった枝や内側に伸びた枝により内部が混み合うため、不要な枝は取り除き、内側にも光が当たるようにします。
- ・ 強日射や高温により日焼け果や尻腐果、赤果の発生が多くなるため、遮光・遮熱の実施やハウスの換気効率を高めてハウス内気温の上昇を抑制します。また、通路やマルチ上に敷わらなどを行い、地温の低下を図ります。
- ・ かん水は少量多回数とし、岩手県農業研究センターで公表した試験研究成果を参考に生育や日射量に応じてかん水回数を調整します。また、追肥もかん水に合わせてこまめに行い、草勢維持や尻腐れ果の低減を図ります。

【参考】令和5年度岩手県農業研究センター試験研究成果「雨よけ夏秋ピーマンの尻腐れ果発生を低減できるかん水指標」

https://www.pref.iwate.jp/agri/res/projects/project_agri/page/002/010/223/r05shidou_23.pdf

- ・ 尻腐果はカルシウム不足が原因ですが、かん水不足や窒素やカリウム等の養分過多が発生を助長します。こまめなかん水や生育に合わせた追肥に加え、カルシウム剤の葉面散布を行い被害軽減に努めます。

(3) 果菜類【露地】の管理

8月は収穫最盛期を迎えるため、収穫調製作業に迫われ栽培管理作業が遅れ気味になりがちです。秋の収量を低下させないためにも、各作業に優先順位をつけて、適期に確実に作業を行います。

高温・乾燥による草勢低下を防ぐため、**かん水を行います**。点滴かん水を行う場合は、**少量多回数を基本**とします。また、敷わらを厚くすることで、地温の上昇を抑え、土壌水分を保ちます。古い葉や病葉、不良果は早めに取り除くとともに、収穫遅れを避けて草勢維持に努めます。

ア きゅうり

草勢維持と病害虫のまん延防止が重要な時期です。

- ・ 古い葉や新しい側枝を覆っている**葉の摘除や整枝**を行うとともに、曲がり果や尻太り果などの**摘果や定期的な追肥**を行い、草勢の維持・回復を図ります（写真1）。
- ・ 側枝の発生が鈍い場合や草勢が低下している時は、半放任または放任とします。
- ・ お盆前は褐斑病や炭疽病、お盆以降はそれらに加えてべと病が増加しやすくなるほか害虫の被害もあるので、**病気の葉を積極的に摘葉し、薬剤が十分にかかるように**します。



写真1 整枝管理のイメージ
(混まないように新しい枝葉の発生を促す)

イ ピーマン

- ・ 収穫の終わった枝や、内側に伸びた枝で内部が混み合うため、不要な枝は取り除いて内側にも光が当たるようにします。
- ・ 土壌水分の乾湿の差が大きいと尻腐果の発生を助長するため、**定期的なかん水や敷わら**を行い、土壌水分の安定化を図ります。また、**定期的にカルシウム資材の葉面散布**を行い、被害軽減に努めます。
- ・ **追肥は、かん水と同時に**行い草勢を維持してください。
- ・ **タバコガ類の発生が始まっています**。ほ場の成虫の飛来を確認するなど防除が遅れないよう注意します。
- ・ 斑点病の発生が見られるため、**被害葉を早期に摘除し薬剤散布**を実施してください。また近年、炭疽病の発生が複数の地域で確認されています。本病害は雨滴のはね上がり等で感染・拡大します。一度発生が拡大すると防除が困難になりますので、**被害が出る前から防除**を行います（写真2）。



写真2 ピーマン炭疽病

(4) 葉茎菜類の管理

ア 雨よけほうれんそう

生育適温以上の時期になるため、遮光などによる気温や地温の低下を図る対策の徹底が重要になります。

- ・ は種から発芽初期は70%程度の遮光を行い、その後本葉4枚程度までは30~40%程度の資材に切替えます。その後は天候の変化に応じて**遮光資材を活用**してください。
- ・ は種時のかん水は、生育を揃えるためムラなく十分に行います。
- ・ **生育中のかん水**は、本葉3~4枚以降に開始し、土壌の乾燥状態に応じて、**涼しい時間帯に複数回に分けて**かん水（1回あたり5~10mm（500~1,000L/a））します（写真3）。ただし、トロケの発生を防ぐため、まとまった量のかん水は収穫3~4日前までとします。
- ・ 例年、萎凋病等の土壌病害により減収するほ場では、土壌消毒を実施し、耐病性品種の使用、転炉スラグ施用による土壌pH矯正、適正施肥、残さの適正処理等の総合的な対策を実施してください。
- ・ アブラムシ類、アザミウマ類が発生している場合は、効果の高い薬剤で防除してください。



写真3 生育中のかん水の開始時期（本葉3~4枚）

イ キャベツ・レタス

気温の上昇や降雨に伴い腐敗性の病害や害虫の発生が多い時期になるため、定期的な防除に加え、発生状況に応じた薬剤選定が重要になります。

- ・ 気温の上昇に伴って発生する株腐病（写真4）や軟腐病等の腐敗性病害に効果の高い薬剤を選定し、**株元まで十分に薬液が届くように薬剤散布を行います。**
- ・ 主要害虫が継続して発生する時期のため、定植時から防除を行います。
- ・ キャベツは、コナガやタマナギンウワバが継続して発生するので、圃場をよく観察し、効果の高い薬剤で防除してください。
- ・ レタスは、オオタバコガの発生初期と結球始期からの防除を徹底し、また、8月のヨトウガが発生する時期に同時防除ができるよう、計画的な薬剤の選択をしてください。
- ・ 圃場が滞水した場合は、乾燥後に畝間の中耕を行って土壌中に空気を送り、必要に応じて液肥を葉面散布して草勢回復を促します。
- ・ これから収穫する作型では、天候により裂球や生理障害の発生が多くなるので、適期収穫に努め、収穫終了後は病害虫の発生源とならないよう速やかに処分してください。



写真4 キャベツの株腐病

ウ ねぎ

- ・ 土寄せは、地上部の生育や葉鞘径の肥大を確認しながら行います。過度に早い土寄せは葉鞘径不足となり軟白部が細いねぎとなります。
- ・ 作型や品種によっては、今が最終土寄せを行う時期となります。土入れを丁寧に行い軟白部と葉の色の境が不鮮明な「ボケ」とならないように、**計画的な作業と適期収穫**を行います。
- ・ 軟腐病、黒斑病等の重点防除時期になります。また、葉枯病（黄色斑紋病斑）を同時防除できるよう薬剤を選択し、収穫前日数に注意しながら定期的に防除を実施してください。

エ アスパラガス（立茎栽培）

- ・ 株の消耗や茎葉の過繁茂を防ぐため、ほう芽してくる若茎を収穫し、弱小茎や曲がった茎は刈り取ります。
- ・ 茎枯病、斑点病、アザミウマ類等の発生が懸念されるため、定期防除を行ってください。

オ アスパラガス（伏せ込み促成栽培）

- ・ 8月は根株への**養分転流に向け重要な時期**になるため、肥料分を抑えることや、秋雨時に発生が増加する斑点病の予防が重要な時期になります。
- ・ 伏せ込み用根株養成では、追肥は8月上旬までに終了させます。
- ・ 8月前半は茎枯病、アザミウマ類、気温が低下し降雨が多くなる時期からは斑点病の予防を中心とした防除とします。ただし、近年は残暑が続くことも多いため天候を勘案して防除を行ってください。

ツキノワグマの出没に関する警報

県は、ツキノワグマの出没に関する一層の注意を促し、更なる被害の防止を図るため、県内全域に「ツキノワグマの出没に関する警報」を発表します。県民の皆さんにはツキノワグマの被害を防止するため、一層の注意をお願いします。

<https://www.pref.iwate.jp/kurashikankyou/shizen/yasei/1049881/1043255.html>

- 1 クマに遭遇しないために
 - ・ 事前に入山地域の出没情報や被害情報を確認する。
 - ・ 音の鳴るグッズを常に鳴らして存在をアピール
- 2 クマを寄せ付けない
 - ・ 食べ残し等、エサになるものを放置しない
 - ・ 農地周辺のやぶを刈り払い、見通しの良い環境を整備する。
- 3 出会ったときの行動
 - ・ 背を向けて走って逃げない
 - ・ 目を離さず静かにゆっくり後ずさる
- 4 襲われそうになったら...
 - ・ クマが攻撃してきたら両腕で顔や頭をカバーし地面に伏せて防御する

次号は8月27日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

熱中症防止

- 日中の気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等作業時間の工夫を行うこと。水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給すること。気温が著しく高くなりやすいハウス等の施設内での作業中については、特に注意。
- 帽子の着用や、汗を発散しやすい服装をすること。作業場所には日よけを設ける等できるだけ日陰で作業するように努めること。
- 暑い環境で体調不良の症状がみられたら、すぐに作業を中断するとともに、涼しい環境へ避難し、水分や塩分を補給すること。意識がない場合や自力で水が飲めない場合、応急処置を行っても良くならない場合は、直ちに病院で手当を受けること。

**6月1日～8月31日は
農薬危害防止運動期間です**

- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬の保管・管理は適切にしましょう

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。

農作物技術情報 第5号 花き

発行日 令和8年7月30日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用
二次元コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ 共 通 適期収穫と出荷選別を徹底しましょう。
圃場が乾燥する前にかん水しましょう。
来年に向けた収穫後管理を適期に行いましょう。
- ◆ りんどう 黒斑病、ハダニ類、オオタバコガ等病害虫の適期防除を行いましょう。
収穫後の圃場の残花処理や病害虫防除を適切に行いましょう。
- ◆ 小 ぎ く オオタバコガ、ハダニ类等病害虫防除を徹底しましょう。

りんどう

1 生育概況

盆需要期向けの早生種の開花は、平年並みとなっています。着蕾期以降の高温の影響で、一部の品種で花卉の着色不良がみられています。また、晩生種の生育は、概ね平年並みとなっています。

病害虫では、黒斑病、ハダニ類、オオタバコガの発生が増加しています。また、アザミウマ類、リンドウホソハマキの発生がみられています。

2 栽培管理

（1）かん水・排水対策

晴天が続く場合、ほ場が過度に乾燥しないよう通路かん水を行います。ただし、日中の高温時の入水や長時間の滞水は、熱水によって株に障害が発生する可能性がありますので避けます。

また、大雨に備え水路などからの流入水を防ぐため、畦畔の補強、水路の泥やごみの除去を行います。ほ場が滞水した場合は、排水路に水が流れやすくなるよう溝切りをして速やかに排水します。

（2）ネット管理

茎の曲がりが生じないように、随時フラワーネットの位置を調整します。また、今後の台風に備え、ネットと支柱を点検・補強します。

（3）追肥（礼肥）

中生品種までは、収穫後に速効性肥料で窒素、カリ各成分量で3～5 kg/10 a を施用します。

（4）残花処理

収穫後の残花は、アザミウマ類、アブラムシ類等の害虫や花腐菌核病の増殖・感染源となります（写真1）。アブラムシ類はウイルスを伝搬するため、発生すると翌年のウイルス病が増加しやすくなります。花蕾の着いている部分の茎を折り取り（花茎除去）、除去した花茎は放置せずほ場外で処分します（写真2）。この際、ウイルスの伝染を防ぐため、花茎は手で折り取り、刃

物は使わないようにします。



写真1 残花処理前



写真2 残花処理後（花茎除去）

3 収穫・調製

（1） 収穫・調製

収穫前に各地域の出荷目揃会等で出荷規格を確認し、それに応じた選別、調製を行い出荷します。特に、適切な開花状態（切り前）で出荷できるよう、**適期に収穫**します。

（2） 鮮度保持

収穫後は日陰で速やかに水揚げを行います。水揚げ容器は、内側にぬめりが生じないようにこまめに洗浄します。また、水揚げに用いる水は**飲用可能なものとし毎回交換**します。

4 病虫害防除

（1） 黒斑病

7月中旬頃から**発生が増加**しています。例年、8月以降に降雨が多くなると発生が増えますので注意します。特に、着蕾期になると草勢が衰え、上位葉や側芽、がく片に感染し発病しやすくなりますので、**着蕾期に効果が高い薬剤で防除**します（写真3, 4）。薬剤散布する場合は、**降雨前に散布する**ようにします。

また、葉の傷口等から容易に感染するため、台風の接近後に感染が拡大した事例があります。治療は困難ですので、有効薬剤による予防散布を継続します。



写真3 葉に発生した黒斑病



写真4 がく片に発生した黒斑病

(2) 葉枯病

現在、発生は少なく抑えられていますが、上位葉に発生がみられるほ場も確認されていますので、**降雨前の予防散布**を継続します。また、**新植苗**で多発すると翌年の生育不良や株の枯死の原因になりますので、採花ほ場と同様に**定期的に薬剤防除**します。

(3) 花腐菌核病

例年、気温が低下し始める8月中旬頃から発生が始まります。このため、猛暑の年は発生が遅くなる傾向です。県の防除情報を参考にし、**適期に有効薬剤を散布**します。また、この病気は一次感染が着色期以降の花蕾であるため、上述した**収穫後の花茎除去が有効な対策**となります。

(4) ハダニ類

7月に入り発生が増加しています。ほ場をよく観察し、**発生初期の防除**を心がけます。下葉の黄化や、葉裏に多数の白色微小斑点・褐色のカスリ状模様がある場合は、ハダニ類の食害による可能性があります(写真5, 6)。自分で判断が難しい場合は、農業改良普及センター等の指導機関に相談してください。

また、ハダニ類に薬液が付着しなければ薬剤の効果が得られませんので、葉裏にしっかり薬液がかかるよう、**動力噴霧器の圧力を高めにして丁寧に散布**します。



写真5 葉裏に寄生するナミハダニ



写真6 ハダニ類に吸汁された箇所は葉の表から見ると黄化している

(5) オオタバコガ

各地域のフェロモントラップ調査では、7月中旬から誘殺数が増加しています。また、生長部付近への産卵や幼虫の食害が確認されています。今年は発生が少なく経過していましたが、今後注意が必要です。生長点付近の茎葉や花蕾に産卵し、幼虫が花蕾内部に侵入し加害しますので、**着色が始まるほ場では防除を開始**します(写真7, 8)。また、収穫しない花蕾の中で幼虫が成長し、次世代の発生源となりますので、**花蕾は必ず折り取りほ場外で処分**します。



写真7 花蕾への産卵

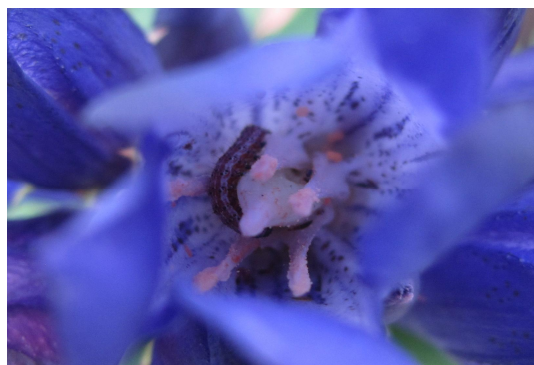


写真8 花内部に侵入した幼虫

（６） アザミウマ類

高温、乾燥で経過すると多発しますので、今後の発生状況に注意が必要です。花蕾の着色に伴い成虫が飛来し増殖しますので、花卉が着色しはじめた頃から薬剤防除を開始します。また、収穫しない花蕾をは場に残すとそこが発生源となり、次に開花する品種に飛来して加害しますので、**花蕾の着いている部分を折り取りほ場で処分**します。

小ぎく

１ 生育概況

８月咲き品種の開花は、昨年より早く**平年並み**となっています。また、９月咲き品種の生育は、**概ね平年並み**となっています。

病害虫では、オオタバコガ、ハダニ類の発生が増加しています。また、白さび病、アザミウマ類、アブラムシ類の発生がみられています。

２ 栽培管理

（１） かん水・排水対策

高温が続いていますので、乾燥が続く場合は**萎れる前にかん水**します。ただし、高温時の滞水に著しく弱く、根腐れを起こして枯れ上がりしやすいので、**高温時のかん水は避けます**。大雨後の排水対策も重要で、**ほ場内が冠水した場合は、溝切り等によって速やかに排水を促します**。

（２） ネット管理

りんどうと同様、茎の曲がりが生じないように、**随時フラワーネットの位置を調整**します。また、今後の台風に備え、**ネットと支柱を点検・補強**します。

（３） 伏せ込み用親株選抜

株の状態の判断は収穫後では難しくなるため、**必ず収穫前に選抜**します。開花期が目的とする時期に合っていること、草丈がよく伸び本来の品種特性を備えて揃っていること、葉の枯れ上がりが少ないこと、病害虫（特にウイルス、ウイロイド、土壤伝染性病害）のないことを確認して優良な株を選抜し、目印を付けておきます。

（４） 収穫後管理

伏せ込みに利用する株は、収穫後に地上部が伸びすぎないように地際５～１０cmのところでは台刈りをします。その後、速効性の化成肥料を窒素成分量で３kg/１０a程度施用します。マルチ栽培では、生育を促すために台刈り後にマルチを除去して土寄せするのが基本ですが、除草労力を考慮して決めます。なお、かき芽で伏せ込む場合は、台刈り後に発生した側枝に土寄せをして側枝の発根を促します。

３ 収穫・調製

（１） 収穫・調製

収穫前に各地域の出荷目揃会等で出荷規格を確認し、それに応じた選別、調製を行い出荷します。特に、適切な開花状態（切り前）で出荷できるよう、**適期に収穫**します。気温が高い時期は収穫後の開花が進みやすいので、切り前に注意します。

（２） 鮮度保持

りんどうと同様に、**収穫後は日陰で速やかに水揚げ**を行います。水揚げ容器は、内側にぬめり

が生じないようこまめに洗浄します。また、水揚げに用いる水は飲用可能なものとし毎回交換します。

4 病害虫防除

(1) 白さび病

気温が高く、発生は少なくなっていますが、**降雨前の薬剤散布で予防**に努めます。発生の有無や収穫の前後にかかわらず、定期的な防除を継続することが重要です。発病後は罹病葉を除去し、ほ場外に持ち出して処分し、治療効果の高い薬剤を散布します。一般に暑い時期は症状が治まる傾向にありますが、秋雨時期に再び増加するおそれがありますので注意します。

(2) ハダニ類

7月中旬頃から発生が増加しています。ほ場をよく観察し、発生初期の防除を心がけます。ハダニ類に薬液が付着しなければ薬剤の効果が得られませんので、葉裏にしっかり薬液がかかるよう、**動力噴霧器の圧力を高めにして丁寧に散布**します。

(3) オオタバコガ

各地域のフェロモントラップ調査では、7月中旬から誘殺数が増加しています。また、生長部付近の茎葉や花蕾の食害が確認されています（写真9, 10）。**着蕾が始まる前から防除を開始**します。例年、8月以降に発生が増加しますので、ほ場をよく観察し早期発見に努めるとともに、各地域の防除暦や防除情報に注意し防除します。



写真9 着蕾前の生長部の食害



写真10 蕾の食害

ツキノワグマの出没に関する警報

県は、ツキノワグマの出没に関する一層の注意を促し、更なる被害の防止を図るため、県内全域に「ツキノワグマの出没に関する警報」を発表します。県民の皆さんにはツキノワグマの被害を防止するため、一層の注意をお願いします。

<https://www.pref.iwate.jp/kurashikankyou/shizen/yasei/1049881/1043255.html>

- 1 クマに遭遇しないために
 - ・ 事前に入山地域の出没情報や被害情報を確認する。
 - ・ 音の鳴るグッズを常に鳴らして存在をアピール
- 2 クマを寄せ付けない
 - ・ 食べ残し等、エサになるものを放置しない
 - ・ 農地周辺のやぶを刈り払い、見通しの良い環境を整備する。
- 3 出会ったときの行動
 - ・ 背を向けて走って逃げない
 - ・ 目を離さず静かにゆっくり後ずさる
- 4 襲われそうになったら...
 - ・ クマが攻撃してきたら両腕で顔や頭をカバーし地面に伏せて防御する

次号は8月27日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

熱中症防止

- 日中の気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等作業時間の工夫を行うこと。水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給すること。気温が著しく高くなりやすいハウス等の施設内での作業中については、特に注意。
- 帽子の着用や、汗を発散しやすい服装をすること。作業場所には日よけを設ける等できるだけ日陰で作業するように努めること。
- 暑い環境で体調不良の症状がみられたら、すぐに作業を中断するとともに、涼しい環境へ避難し、水分や塩分を補給すること。意識がない場合や自力で水が飲めない場合、応急処置を行っても良くならない場合は、直ちに病院で手当を受けること。

**6月1日～8月31日は
農薬危害防止運動期間です**

- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬の保管・管理は適切にしましょう

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。

農作物技術情報 第5号 果樹

発行日 令和8年7月30日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用
二次元コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ りんご 果実生育は平年及び前年を上回っています。見直し摘果を進めましょう。誘引や支柱立て、徒長枝の整理を行い、樹幹内部の受光体制の改善に努めます。早生の葉摘み開始は収穫予定の10～20日前ですが、高温が続く場合は無理に行わないでください。
- ◆ ぶどう 品質向上のため、適切な着果管理と病虫害防除に努め、適期に収穫しましょう。また、近年夏季の局所的大雨によって裂果が助長されていることから、急激な土壌水分の変化を防ぐため、排水対策の実施や乾燥時の下草管理などに努めましょう。

りんご

1 生育概況

生育診断圃の果実生育（横径）は、7月1日時点の県平均で「ジョナゴールド」が平年比106%、前年比109%、「ふじ」が平年比115%、前年比114%でした（表1）。

降霜による花器の萎縮が確認された園地では、側果も利用しており、果そう間で果実の肥大にばらつきが見られますが、開花が平年より8日程度早かったこともあり、現時点の生育は平年及び前年を上回っています。

なお、向こう1か月（7/25～8/24）の平均気温は高い予報です（7/23、仙台管区气象台発表）。今後も気象情報に注意し、本号のほか、令和8年7月24日発行の「農作物技術情報特別号 高温対策」も参照し、対策を講じてください。

表1 生育診断圃における果実生育（横径）状況（7月1日時点）

市町村名	地 区	ジョナゴールド					ふ じ				
		本年 (R8)	平年 ※4	比	前年 (R7)	比	本年 (R8)	平年 ※4	比	前年 (R7)	比
岩手県農業研究センター		51.0	48.5	105%	52.8	97%	46.3	43.6	106%	44.4	104%
盛岡市	三ツ割	51.0	47.1	108%	45.2	113%	48.3	42.3	114%	39.2	123%
花巻市	石鳥谷※1	51.5	49.7	104%	44.8	115%	49.1	42.7	115%	40.8	120%
奥州市	江刺樽輪	45.4	46.0	99%	41.4	110%	46.7	42.2	111%	38.7	121%
一関市	狐禅寺※2	51.3	48.4	106%	46.3	111%	46.3	41.8	111%	42.5	109%
陸前高田市	米崎	50.6	48.9	103%	52.0	97%	51.4	43.6	118%	47.2	109%
宮古市	崎山	-	-	-	-	-	51.5	43.1	119%	45.4	113%
二戸市	金田一	51.7	45.6	113%	47.8	108%	47.7	41.1	116%	44.9	106%
県平均値※1（参考）		50.3	47.6	106%	46.3	109%	48.7	42.4	115%	42.7	114%

※1 県平均値に農研センターのデータは含まれていない。

※2 R4年度より定点が変更となったため、平年値は花巻市上根子（前定点）の値を使用。

※3 R2年度より定点が変更となったため、平年値は一関市花泉（前定点）の値を使用。

※4 平年値は昭和60年～令和7年の平均（地点変更時はその年次からの平均）

2 栽培管理のポイント

りんごは、現在、来年の花芽が形成する時期に入っていますが、高温や日照不足、干ばつの場合は、花芽形成が抑制されます。また、多湿条件下では、病害の感染・発生が懸念されます。

花芽形成の促進や病害の発生防止のため、日光や薬剤が樹幹内部まで通るように**誘引や徒長枝の整理を行い、受光体制の改善**に努めます。また、着果数の多い部分や生育不良果などの摘果を行い、いま一度着果量を見直しましょう。

りんごの早生品種は、果実の着色と内部品質が一致しないまま収穫期を迎える場合があります。果肉の硬度や地色の抜けに注意して、収穫が遅れないよう**適期収穫に努めてください**。

(1) 摘果の見直し、誘引、徒長枝の整理

仕上げ摘果はほぼ終了し、**見直し摘果を行う時期**です。着果数の多い部分や生育不良果などを摘果します。「ふじ」は、生育不良果のほか、つる割れ果も見えてきますので、随時摘果します。

樹体管理では、枝の誘引や支柱立て、徒長枝の間引きなどを行い、**樹冠内部への日光や薬剤の通りを良く**します。また、台風などに備えて**支柱との結束を確認し、園地の排水対策**も行います。

(2) 早生種の着色管理

ア 早生種の葉摘み開始時期は、収穫予定の10～20日前です。

イ 果そう葉を中心に、最初は軽く2～3枚程度摘みます。

ウ 陽光面の着色が進んだら、葉や枝カゲをつくらないように玉回しを行うとともに、適当な強さに葉を摘みます。必要以上の葉摘みは、逆に着色が進まないのを避けます。

エ 着色適温は10～20℃です。残暑で最低気温が20℃を超える日が続く場合は、いくら葉を摘んでも着色が進まないのを注意してください。

オ りんごは、日最高気温がおおむね32℃以上になると日焼け果が発生しやすくなります。特に早生種は、高温期に葉摘みを行うため、果面温度が急激に上昇し、日焼けが発生しやすくなります。**日焼け果の発生を軽減**するために次の点に注意してください。

- ・ 葉摘みは、果面温度が十分に上昇した日中に実施する。
- ・ ただし、日最高気温が32℃以上となる場合は、葉摘み作業を控えるか夕方に実施する。
- ・ 過度な夏季せん定は避ける。

カ **土壌水分の急激な変化**による樹体の水分ストレスによっても、日焼け果の発生が助長されるため、高温乾燥が続く場合は、幼木や若木を中心にかん水を行い、**土壌水分を適切に保つよう**努めます。また、養水分の競合を避けるため草生は短く維持し、樹幹下に刈草やわら等でマルチを施すことも有効です。

(3) 極早生品種「紅ロマン」の日焼け対策

ア 「紅ロマン」は容易に着色する品種なので、最小限の葉摘みを心掛け、日焼けを防ぎます。1回目の葉摘みは、収穫予定の10日前頃に、果実に触れている葉を軽く摘む程度に留めてください。2回目の葉摘みは、1回目の1週間後を目安に、玉回しと併せて行いますが、**高温下では無理に葉摘みを行わず、玉回しを中心に進めます**。

イ 「紅ロマン」では、気温が急激に上昇する危険のある梅雨明け後に、**被覆資材（商品名：サンテ®）で果実を被覆**することが有効です（写真1）。果面が受ける日射量が減少し、果面温度の上昇が抑えられ、日焼け果の発生を軽減できます。

日最高気温が32℃以上の日数に比例して、日焼け果の発生割合や発生程度は大きくなる傾向があるので、週間天気予報などを活用しながら対策を講じます。

取り付ける際は、果実の肩まで被い、取り外しの際は、果実が落下しないように行います。

なお、収穫時までサンテ®で被覆しておくと、果実の着色に影響を及ぼすので、**収穫予定の数日前に取り外す**作業が必須となります。



写真1 「紅ロマン」における日焼け果の症状(左)とサンテ®の被覆状況(右)

(4) 落果防止剤の散布

収穫前に落果しやすい「つがる」や「きおう」には、落果防止剤を使用して落果を抑えます。使用の際は、必ずラベルの登録内容を確認してください。特に「きおう」の**内部裂果で早めに熟す果実の取り扱い**は、農薬の使用基準に違反しないよう**厳重に注意**してください。

また、夏秋期に高温となる年は、収穫前落果が助長されることがあります。過去に収穫前落果が発生した品種については、**落果防止剤の散布を検討**し、準備しておきます。品種・園地ごとに過去の発生実態を把握したうえで、散布の可否を判断します。

なお、落果防止剤の散布により、収穫期の前進化や果実硬度の低下が想定されるため、**使用の判断にあたっては、集出荷・販売の対応も併せて検討**してください。

(5) 早生種の収穫

ア 一般に、りんごは満開後一定の日数で成熟する傾向があり、この日数は品種によってほぼ定まっています。今年の満開日から見た**収穫期の目安は表2のとおり**ですが、これは北上市成田の満開日より算出しており、県南の平場ではこの予想日より早まることが予想されます。

また、向こう1か月(7/25～8/24)の平均気温は高い予報であり(7/23、仙台管区気象台発表)、高温により着色しにくくなる可能性もあるため、過度な着色は期待せず、**食味・硬度等を確認の上、適期収穫**を心がけてください。

イ **すぐりもぎが基本**です。特に熟期が不揃いな「つがる」や「きおう」は徹底します。

ウ 「紅ロマン」は、**収穫前の7月下旬に、心かびの果実が先行して着色**するため、これは樹上で除外します。また、収穫については、着色が先行するため、食味を確かめ、香りや果汁が十分にでてから収穫してください。地色は、いくらか青みが残る程度を目安とし、果肉が白いうちに収穫します。なお、果実品質を保持するため、収穫期が高温で経過する場合は、**果実温度が低い朝に収穫**し、できるだけ早く出荷(予冷)してください。高温年には、果肉が褐変する「**ゴム症**」が発生することがありますが、果皮の上から水浸状の症状が見えるので、**出荷物に混入させないよう注意**してください。

エ 「きおう」は、ツル浮き(内部裂果)が発生しやすい品種で、特に降水量が多い8月に入ってから発生します。内部裂果したものは正常果よりも早く熟すので、特に**収穫前半はツル浮き果が混入しないよう注意**してください。

オ 「つがる」は、収穫後の果肉の軟化が早く、収穫が遅れると果面に油上りが発生しやすいので、地色に注意して**遅取りを避け、収穫後はできるだけ早めに予冷**してください。

表2 早生種の収穫期の目安

品種	満開日※1	収穫期 までの 満開後数	満開後日数 による 収穫予想日※2	収穫期の果実品質の目安			
				硬度 (lbs)	糖度 (Brix%)	デンプン 指数	カラーチャート 指数※3
紅ロマン	4月27日	100 ～ 110日	8月5日 ～ 8月15日	—	12～14	2.5～3	2.5～3
きおう	4月29日	115 ～ 125日	8月22日 ～ 9月1日	13～14	13以上	2～3	2.5～3.5
つがる	4月29日	115 ～ 125日	8月22日 ～ 9月1日	13～14	12～14	3～3.5	2～3

※1 満開日は農業研究センター(北上市成田)観測日 ※2 きおう、つがるは収穫開始予想日

※3 紅ロマン、つがるはふじ地色用、きおうはきおう表面色用を使用

(6) 「紅いわて」の収穫前管理

「紅いわて」は着色の非常に良好な品種であるため、軽い葉摘み作業でも十分に着色します。陽光面が着色した時点で果面に付着している葉を取り除き、枝カゲをつくらないよう軽く玉まわしを行います。「紅いわて」はつるが短い傾向にあるため、玉まわしは慎重に行ってください。

高温年は、糖代謝の異常で「早期みつ症」や「みつ症」が発生することがあります。一般的に発生程度は軽微ですが、果皮の上から水浸状の症状が見えるものについては、出荷物に混入させないように注意してください。

(7) 夏季せん定（わい性樹）

ア 樹勢の強い樹を対象に、8月下旬～9月上旬にかけて行います。

イ 側枝の上面から発生している30cm以上の直上枝を間引くほか、30cm以下の新梢でも枝量と混み具合を見ながら、日光、薬剤が通る程度に適宜間引きます。

ウ なお、過度な夏季せん定は樹勢を弱めるとともに、果実の日焼けを助長します。樹勢の低下は、紫紋羽病の発病誘因となることがありますので、発病の恐れのあるところでの夏季せん定は最小限にとどめてください。また、果実の日焼けを防止するためにも、過度な夏季せん定は控えます。

3 病虫害防除

- (1) 褐斑病や斑点落葉病の発生に注意し、多発が懸念される場合は速やかに特別散布を実施します。
- (2) 炭疽病は、6月後半が高温で推移した場合、病原性が強い *C. gloeosporioides* による秋期の多発を警戒し、入梅期（6月中下旬～7月上旬）のほか、**8月の防除も徹底**します。病原菌は雨媒伝染するため、降雨前の予防散布を徹底し、**樹上の発病果は重要な伝染源となるため、見つけ次第摘み取り処分**します。
- (3) 果樹カメムシ類は、園地をよく観察の上、大量の飛来が確認された場合は、効果の高い薬剤により速やかに防除を実施してください。
- (4) シンクイムシ類の発生に留意し、散布間隔を空けすぎないように防除を行きましょう。
- (5) **ハダニ類は、主幹近くの新梢葉（普通樹では主幹や主枝の徒長枝葉）をよく観察し、要防除水準（寄生葉率30%）に達した場合は直ちに防除を実施してください。**
- (6) その他の病虫害についても、病虫害防除所の発生予察情報や防除情報を参照し、園地の発生状況をよく観察して、適期防除に努めてください。
- (7) 早生品種の収穫が近づいています。薬剤散布は、**農薬の使用基準（特に収穫前日数）をよく確認して、誤使用のないよう注意**してください。除草剤についても同様です。

ぶどう

1 生育概況

生育診断圃（紫波町）の「キャンベルアーリー」の結実率は、55.5%で**平年及び前年より良好**です（表3）。また、新梢長や節数、房長は平年を上回り、果径は平年並です。

本年の展葉期や満開期は平年より10日早かったことから、新梢や果房の生育は平年を上回り概ね順調です。一方、**結実率が良好**であることから、**摘粒の見直し作業が遅れないよう注意**し、果径を平年並以上に維持することが重要となります。

なお、向こう1か月（7/25～8/24）の平均気温は高く、降水量は平年並の予報です（7/23、仙台管区气象台発表）。ぶどうは、比較的高温・乾燥に強い樹種ですが、令和7年のように極端な高温・干ばつがあると果実肥大が抑制されるため、今後も**気象情報に注意**し、葉色や新梢の生育を観察しながら**適宜対策**を講じます。本号のほか、令和8年7月24日発行の「農作物技術情報特別号 高温対策」も参照してください。

表3 ぶどう(キャンベルアーリー)の生育状況(観測地点:紫波町赤沢)

調査年次	結実率 (%)	7月15日時点での生育			
		新梢長 (cm)	節数 (葉数)	房長 (cm)	果径 (mm)
本年(R8)	55.5	176.1	22.5	17.0	16.5
平 年	43.3	130.3	16.2	14.7	16.3
平年差・比	12.2	135%	139%	116%	101%
前年(R7)	46.7	163.9	17.0	16.1	17.7
前年差・比	8.8	107%	132%	106%	93%

※平年値のうち、結実率は、平成9年から令和6年の平均値、他の数値は、昭和49年から令和7年の平均値。

2 栽培管理のポイント

(1) 摘粒の見直し

果房の形を整え、品質を向上させるため、**着粒の多い密着房、裂果粒、病害虫果粒を中心に摘粒を実施**します。1房当たり粒数の目安は、「キャンベルアーリー」、「ナイアガラ」が70粒程度、「サニールージュ」が50粒程度、「シャインマスカット」が40～50粒、「紅伊豆」が30～40粒、となりますので、見直しを行ってください。

(2) 摘 房

果実の糖度や着色など品質を向上させ、同時に樹体の養分の消耗を防いで翌年の花芽の充実を図るため、**適正着房数を目標に摘房を実施**します(表4)。

しかし、「キャンベルアーリー」で樹勢が弱い場合は、表4によらず1房当たりに必要な葉数(概ね15～24枚で1房、25枚以上で2房)で着房数を制限してください。

「紅伊豆」などの大粒種において、樹勢をコントロールする目的で1新梢2房としている場合でも、着色や糖度の上昇の遅れ、樹体の凍寒害発生を防ぐために、着色開始を目途に最終房数とします。

なお、高温の影響や日照不足などで着色遅延となり収穫が遅れると、果実品質の低下や樹体の耐凍性の低下が懸念されます。場合によっては、着房数を基準より減らして着色促進を図ることも必要です。**過着果や弱樹勢の樹があれば、早めに着房数を見直し、着色の向上に努めます。**

表4 主な品種の収量構成要素の目安

品種※1	仕立様式	新梢数※2 (本/坪)	着房数		必要な葉数	目標収量 (kg/10a)
			(房/坪)	(房/本数)		
キャンベルアーリー	短梢	20	27～30	1.35～1.5	1房:12～16枚	2200
					2房:17～22枚	
サニールージュ	短梢	19～20	16	0.8	15～18枚	1700
紅伊豆	長梢	15	10～12	0.67～0.8		1200
シャインマスカット	短梢	8		0.8		1600

※1 「サニールージュ」は暫定値

※2 「シャインマスカット」は主枝1mあたりの新梢数

(3) 新梢管理

棚面を明るくして果房の着色を向上させ、樹勢をコントロールして養分の浪費を防ぐため、**勢力の強い新梢を中心に間引きや摘心を行います**。硬核期以降(7月下旬以降)に実施しますが、①赤色系品種、②紫黒色系品種、③白色系品種の順に棚面を明るくします。

短梢栽培では、葉数確保のため副梢についても基部から2～3枚の葉を残して摘心していきます。しかし、**混み合っている場合は適宜間引いてください。**

なお、成熟期の高温により、果房の上部に日焼けが発生し、果粒が萎れることがあります。新梢の誘引を見直しつつ、**果実に直接日が当たらないよう注意するとともに、過度な摘葉は控えます**。また、クラフト傘などを利用した傘かけも有効です。

(4) 収 穫

今年の収穫は、平年より早まることが想定されます。着色だけではなく、**糖度などの食味に留意しながら（表5）、適期収穫に努めます**。特に、高温が続くと着色が緩慢になるので、過度な着色は期待せず、**食味や果肉の硬さを重視して収穫します**。

収穫は、**果実温度が低い早朝から午前中に行います**。降雨後は、糖度も下がり、輸送中の腐敗も多くなるので避けてください。

選果・調整は、果粉を落とさないように穂柄を持ち、未熟果、腐敗果、裂果等を除き、出荷形態に即して房形を整え出荷します。

なお、収穫に当たっては、**農薬使用基準の使用時期（収穫前日数）に注意してください**。

表5 品種別収穫時期の目安

品種	基準糖度	房の状態	備考
デラウエア	18%以上	着色完了2～3日後	酸抜けが遅い、食味重視
サニールージュ	18%	房全体が紫赤色	脱粒少ない
キャンベルアーリー	14%以上	房全体が黒紫色	
紅伊豆	18%以上	房全体が鮮紅色	過熟果は軟化や脱粒が多い
シャインマスカット	18%	房全体が黄緑色	



写真2 裂果した「紅伊豆」

(5) 裂果対策

収穫直前の急激な土壌水分の変化は、裂果の発生を助長します（写真2）。土壌が乾燥し過ぎないように、土壌水分を収奪する雑草の刈り取り、樹冠下への敷きワラ等を実施します。また、降雨があった場合には、**過剰な水分を早期に排水できる**よう、根域周辺にビニール等を敷く、溝掘り（明渠）するなどの対策を実施します。

「紅伊豆」などの**雨よけハウス栽培**では、温度が高くなりやすいハウス中央部などで、果実の着色不良や果肉の軟化が裂果や脱粒を誘発することがあります。気温が高くなると予想される日は、サイドのビニールを巻き上げる、換気扇を利用する等**温度が上がりすぎないように努めます**。

3 病虫害防除

- (1) 病虫害の発生状況に応じて防除を実施しますが、収穫が間近になっているため、**農薬の使用基準（収穫前日数、散布濃度、使用回数）や散布履歴を十分確認した上で防除を行ってください**。薬剤によっては、果粉の溶脱、果面の汚れなど品質を損ねることがありますので、薬剤を選択する際は注意してください。
- (2) 晩腐病は、6月後半が高温で推移する場合、病原性が強い *C. gloeosporioides* による多発を警戒し、入梅期（6月中下旬～7月上旬）のほか、8月の防除も徹底します。病原菌は雨媒伝染するため、降雨前の予防散布を徹底し、**樹上の発病果は重要な伝染源となるため、見つけ次第摘み取り処分**します。

ツキノワグマの出没に関する警報

県は、ツキノワグマの出没に関する一層の注意を促し、更なる被害の防止を図るため、県内全域に「ツキノワグマの出没に関する警報」を発表します。県民の皆さんにはツキノワグマの被害を防止するため、一層の注意をお願いします。

<https://www.pref.iwate.jp/kurashikankyou/shizen/yasei/1049881/1043255.html>

- 1 クマに遭遇しないために
 - ・ 事前に入山地域の出没情報や被害情報を確認する。
 - ・ 音の鳴るグッズを常に鳴らして存在をアピール
- 2 クマを寄せ付けない
 - ・ 食べ残し等、エサになるものを放置しない
 - ・ 農地周辺のやぶを刈り払い、見通しの良い環境を整備する。
- 3 出会ったときの行動
 - ・ 背を向けて走って逃げない
 - ・ 目を離さず静かにゆっくり後ずさる
- 4 襲われそうになったら...
 - ・ クマが攻撃してきたら両腕で顔や頭をカバーし地面に伏せて防御する

次号は8月27日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

熱中症
防止

- 日中の気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等作業時間の工夫を行うこと。水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給すること。気温が著しく高くなりやすいハウス等の施設内での作業中については、特に注意。
- 帽子の着用や、汗を発散しやすい服装をすること。作業場所には日よけを設ける等できるだけ日陰で作業するように努めること。
- 暑い環境で体調不良の症状がみられたら、すぐに作業を中断するとともに、涼しい環境へ避難し、水分や塩分を補給すること。意識がない場合や自力で水が飲めない場合、応急処置を行っても良くならない場合は、直ちに病院で手当を受けること。

**6月1日～8月31日は
農薬危害防止運動期間です**

- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬の保管・管理は適切にしましょう

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。

農作物技術情報 第5号 畜産

発行日 令和8年7月30日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用
二次元コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆牧 草 収穫は、夏枯れを避けるため地際から 10cm 以上の刈り取り高さとしましょう。収穫・追肥は、高温・乾燥時を極力避け、曇天時に行いましょう。追肥は、可能であれば降雨の前後に行いましょう。草地更新・追播を行う場合は、計画的に作業しましょう。
- ◆飼料用とうもろこし 獣害対策として、電気柵を効果的に設置しましょう。高温が続くと、登熟が早まることが予想されますので、収穫の準備をすすめましょう。
- ◆大 家 畜 牛舎環境面や飼料給与面からの暑熱対策を継続しましょう。夜間も送風を続け、クールダウンさせましょう。

牧草

1 生育状況

2 番草は、7 月中旬頃から収穫が盛期となっています。刈り遅れに注意して収穫をすすめます。6 月の気温は平年並みからやや低い傾向であったため、暑熱の影響は少ない傾向です。

2 再生草の管理

寒地型牧草は、概ね平均気温 25℃以上で生育が止まり、30℃を超えると夏枯れします。刈取りや施肥は高温・乾燥時を避け、可能な限り降雨前後や曇天時に行います。

3 草地更新・追播

草地更新や追播をする場合は、8 月下旬から 9 月中旬に播種となるよう、日程を逆算して耕起、碎土、整地作業を行います。作業工程は表 1 を参考に選定してください。

播種が早すぎると干ばつのため発芽した個体が死滅しますので、草が夜露に濡れる頃に播種します。播種が遅すぎると越冬できないか翌春に出穂しないなど、生育が期待できないため、積雪前に 10 葉期（草丈 10cm 以上、分けつ 3 本以上）まで生育できる時期に播種を終えます。

土壌改良の必要がなく、雑草が少ない場合は、牧草種子の追播も増収効果が期待できます。

土壌改良資材は、pH6.5 矯正量の石灰質資材と、可給態リン酸が 5-10mg/100g となるリン酸質資材を施用します（施用量は土壌分析値から算出します。）。

播種時の施肥量の標準は、窒素 7～10、リン酸 10～15、カリ 4～7kg/10a です。牧草の播種量は表 2 を参考にします。

表1 草地更新・追播の作業工程

区分	主な作業機等	ポイント	7月			8月			9月
			上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬
完全更新	 	①二番草収穫後、除草剤を散布し、プラウで耕起したのち、ディスクやロータリーハローで播種床を作り播種します ②堆肥や石灰などの土壌改良材を施用します ③種子の発芽ムラや枯死を避けるため、播種後、鎮圧を行います		二番草収穫		除草剤散布	堆肥・土改材 耕起 砕土 整地		播種 施肥 鎮圧
完全更新	除草剤播種同日処理  	①一番草収穫後、予め播種床をつくり、雑草を十分生育(30～40日)させ、播種日に非選択性除草剤を散布します。除草剤散布、播種、鎮圧作業は1～2日で完了させます ②ギンギンなど永年生雑草が繁茂した草地にも有効です	除草剤散布	堆肥・土改材 耕起 砕土 整地			この期間に雑草が生育	除草剤散布	播種 施肥 鎮圧
簡易更新	表層攪拌  	①二番草収穫後、除草剤を散布し、ロータリーやディスクハローで播種床を作り、播種します ②堆肥や石灰などの土壌改良材を施用します ③種子の発芽ムラや枯死を避けるため、播種後、鎮圧を行います		二番草収穫		除草剤散布	堆肥・土改材 砕土 整地		播種 施肥 鎮圧
簡易更新	作溝式  追播 穿孔式 	①二番草収穫後、牧草が短いうちに溝を切るまたは地表に穴を付けて播種します ②作溝式播種機の場合、鎮圧は不要ですが、土壌が乾燥する場合、軽く鎮圧します ③牧草のルートマットが厚い場合は、簡易更新か完全更新を選択します		二番草収穫				播種 鎮圧	

表2 牧草の播種基準（採草）

区分	草種	播種量 (kg/ha)	備考
オーチャードグラス主体草地	オーチャードグラス	20	①乾草利用が主体の場合は、乾燥し難いペレニアルライグラスを削除する。 ②アカクローバは、永続性に乏しく乾燥し難いことから、高タンパクな飼料の確保の場合などを除き、適宜削除する。
	ペレニアルライグラス	4	
	シロクローバ(大葉型)	2	
	計	26	
チモシー主体草地	チモシー	15	
	ペレニアルライグラス	4	
	シロクローバ(中葉型)	2	
	アカクローバ	3	
	計	24	

飼料用とうもろこし

1 生育状況

草丈は平年並みに推移していますが、出穂が5～10日早くなっています。高温傾向が続くと、登熟が早まることが予想されますので、機械のメンテナンスや資材の購入等、収穫準備を早めに行います。

2 野生鳥獣被害の確認と電気柵の設置

出穂後は野生獣（クマ・イノシシ）のほ場への侵入が増えます。圃場周辺の草刈りを実施して見通しを良くします。電気柵を設置している場合は、電気柵を目視できる状態にします（写真1）。これまで被害の無かったほ場でも、シカやイノシシの食害がみられています（写真2）。被害が発生していないか、定期的に見回ります。

電気柵のワイヤーの高さは、対象となる野生獣に合わせて設置します。クマ・イノシシの場合は、地際から20cm、40cm、70cmです（写真3）。シカに対しては、120cmを追加して4段張りとします。ワイヤーは、簡易緊張具を使用して、たるみを無くしピンと張ります（写真4）。漏電していないか、定期的を確認し、電圧は5,000ボルト以上を確保します（写真5）。



写真1 圃場周辺の草刈り



写真2 イノシシによる食害を受けた飼料用とうもろこし



写真3 クマ・イノシシ用の電気柵



写真4 簡易緊張具の使用例



写真5 電圧は5,000ボルト以上を確保

大家畜

牛舎環境面と飼料給与面からの暑熱対策を徹底し、分娩前後の代謝病や繁殖障害の予防、生産性の低下を最小に抑えます。

1 暑熱対策

(1) 牛舎周辺の遮熱、遮光

牛舎内に熱を入れない対策を行います。散水する場合(*)は、気化熱による熱の蒸散を目的とし、湿度を上昇させないように、散水量に注意します。

- ☐ 屋根表面への遮熱塗料やドロマイト石灰の塗布
- ☐ 屋根表面への散水*
- ☐ 屋根表面への寒冷紗の設置
- ☐ 屋根裏へのウレタン断熱材の吹き付け、遮熱シートの設置
- ☐ 牛舎の軒下や窓への寒冷紗の設置
- ☐ 牛舎周辺への散水*

(2) 牛舎内の送風と換気

牛体周辺に風速 2 m/秒以上となるように送風を行い、体感温度を下げます（写真 6）。牛体に直接送風する場合は、頸から肩に風を当てます（写真 7）。日中の気温が 25℃を超えた日は、夜間も積極的に送風します。

同じ気温でも、湿度が高いと T H I（温湿度指数）が上昇し体感温度が上がるので、散水等、牛舎内外で水を使用する場合は、適切に換気して湿度が上がらないように管理します。

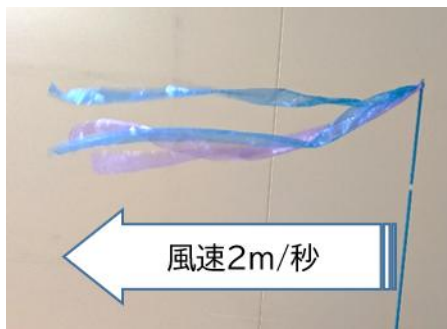


写真 6 風速 2 m は、ナイロン紐が横になびく程度



写真 7 牛の首元に送風する

(3) 給水施設の整備と給水量の確保

気温の上昇に伴い飲水量が増えるので、十分な飲水量を確保します。水槽やウォーターカップは毎日清掃します。

(4) 飼料給与

粗飼料は、ルーメンに滞留する時間が長いほど発酵熱が増加するので、消化性の良い粗飼料を給与します。気温が高い時間帯を避け、涼しい時間帯（早朝・夕方から夜間）に多く採食できるよう、給餌のタイミングを工夫します。

飼料の採食量と反芻が減るとルーメンへの唾液の流入量が減少します。また、呼吸数の増加に伴い唾液中の重炭酸イオンの含量が減少します。このため重曹入りの固形塩、重曹入りのペレットの給与、配合飼料への重曹の添加（目安 100～200g/日・頭）などを対策します。（低カルシウム血症、乳房浮腫を誘発する恐れがあるので、乾乳牛には重曹給与は行いません。）

発汗等によりカルシウム、リン、マグネシウムの要求量も増加するので、乾乳後期牛を除き、通常の 1～2 割増給します。

暑熱時の体温上昇で酸化ストレスが増加するとビタミン類の消耗も増えるため、ビタミン E やセレンなどの抗酸化添加剤の増給も検討します。

ツキノワグマの出没に関する警報

県は、ツキノワグマの出没に関する一層の注意を促し、更なる被害の防止を図るため、県内全域に「ツキノワグマの出没に関する警報」を発表します。県民の皆さんにはツキノワグマの被害を防止するため、一層の注意をお願いします。

<https://www.pref.iwate.jp/kurashikankyoushizen/yasei/1049881/1043255.html>

1 クマに遭遇しないために

- ・ 事前に入山地域の出没情報や被害情報を確認する。
- ・ 音の鳴るグッズを常に鳴らして存在をアピール

2 クマを寄せ付けない

- ・ 食べ残し等、エサになるものを放置しない
- ・ 農地周辺のやぶを刈り払い、見通しの良い環境を整備する。

3 出会ったときの行動

- ・ 背を向けて走って逃げない
- ・ 目を離さず静かにゆっくり後ずさる

4 襲われそうになったら...

- ・ クマが攻撃してきたら両腕で顔や頭をカバーし地面に伏せて防御する

次号は8月27日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

熱中症防止

- 日中の気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等作業時間の工夫を行うこと。水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給すること。気温が著しく高くなりやすいハウス等の施設内での作業中については、特に注意。
- 帽子の着用や、汗を発散しやすい服装をすること。作業場所には日よけを設ける等できるだけ日陰で作業するように努めること。
- 暑い環境で体調不良の症状がみられたら、すぐに作業を中断するとともに、涼しい環境へ避難し、水分や塩分を補給すること。意識がない場合や自力で水が飲めない場合、応急処置を行っても良くならない場合は、直ちに病院で手当を受けること。

**6月1日～8月31日は
農薬危害防止運動期間です**

- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬の保管・管理は適切にしましょう

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。

農作物技術情報 第5号 野生獣対策

発行日 令和8年7月30日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用
二次元コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ クマ人身被害防止 引き続きクマへの最大限の注意をお願いします。
- ◆ 侵入防止対策 防護柵の種類と特徴を確認し、設置しましょう。
- ◆ イノシシの特徴と対策 20、40、70 cmの3段を基本に電気柵を設置しましょう。

1 クマ人身被害防止

- ・ 例年に比べてクマの人里への出没が相次ぎ（図1）、死亡につながる人身事故が今年度に入って既に3件発生するなど（図2）、これまでにない危機的な状況となっています。
- ・ 今後もリスクが高い状況が続くことが見込まれますので、クマ出没状況アプリ「Bears」（図3）などにより出没状況を確認するとともに、これまではクマの出没がない地域においても、最大限の注意をお願いします。

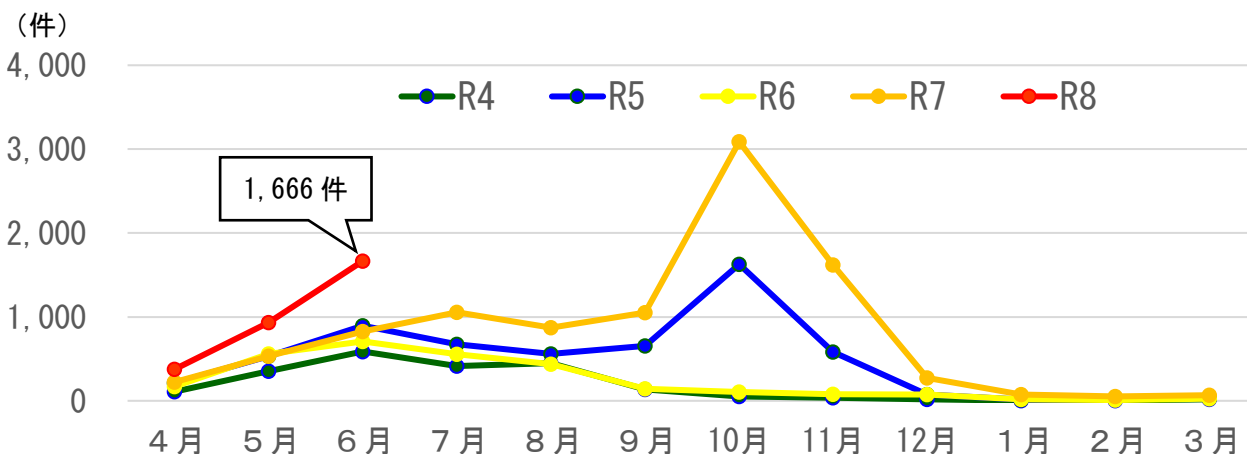


図1 クマの出没件数 (7/16 時点)

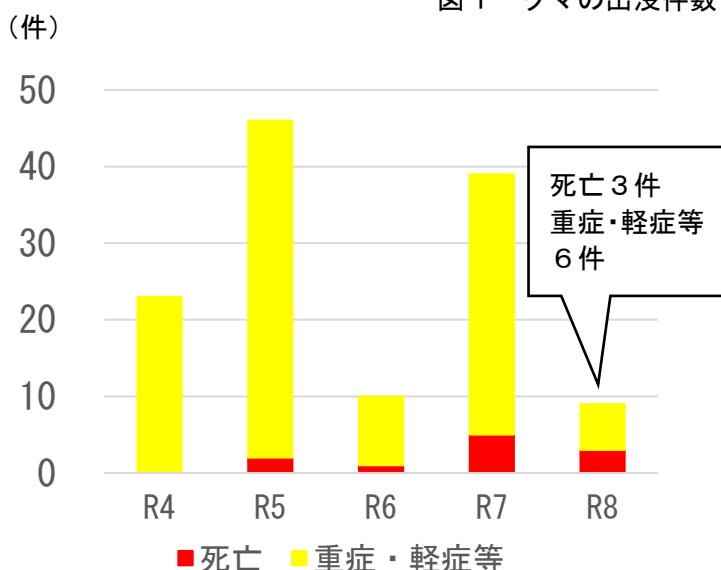


図2 クマによる人身被害 (7/24 時点)



図3 クマ出没情報アプリ「Bears」

こちらの2次元コードから登録できます！



2 侵入防止対策：シカ、イノシシ、クマ

※ 侵入防止対策「侵入防止対策の考え方」、「電気柵の特徴と使い方」は[農作物技術情報第4号](#)参照

(1) 防護柵の種類

- ・ 防護柵は、「物理柵」と「電気柵（心理柵）」の区分に分かれ（表1）、資材費や設置に係る労力などから、県内では「電気柵（心理柵）」が広く利用されています。
- ・ 物理柵は、正しく設置すればシカ、イノシシを防ぐことができますが、クマは登る（写真1）、又は金網などでも破って侵入する可能性があるため、獣種に応じた防護柵の選択が必要です。
- ・ バラ線の柵を用いる事例もありますが、バラ線では侵入を防ぐことはできません（写真2）。

表1 防護柵の種類

区分	種類	主な使用資材
物理柵	金属柵	ワイヤーメッシュ、金網、トタン
	非金属柵	ネット
電気柵 (心理柵)	簡易電気柵	ポリワイヤー、樹脂製等ポール、クリップ、パワーユニット
	恒久電気柵	高張力鋼線、単管パイプ、碍子、パワーユニット

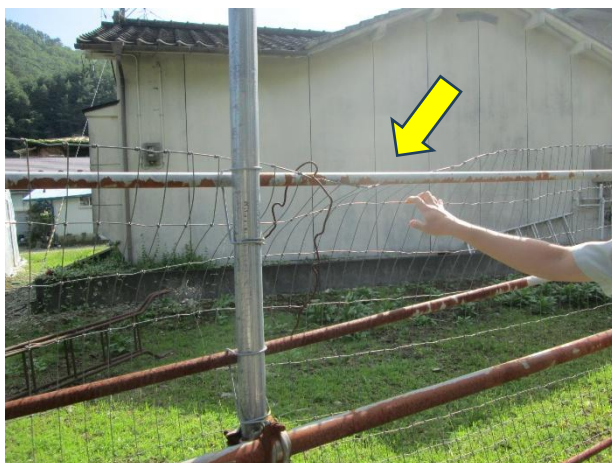


写真1 クマが登って曲がった金網柵



写真2 バラ線をくぐりぬけるシカ

(2) 簡易電気柵と恒久電気柵

- ・ 簡易電気柵と恒久電気柵は、設置や撤収に係る労力や冬期間の稼働の可否などが異なり、防護する作目やほ場の状況により選択します（表2、写真3、写真4）。

表2 簡易電気柵と恒久電気柵の特徴

種類	長所	短所	主な使用事例
簡易電気柵	・ 設置労力の負担が少 ・ 撤収が容易	・ 毎年設置と撤収が必要 ・ 冬期の稼働は不可 ・ 物理的な衝撃に弱い	・ 野菜など収穫期間が限られる作目 ・ 比較的面積が小さい作目
恒久電気柵	・ 支柱の撤収が不要 ・ 冬期も稼働が可能※ ・ 物理的な衝撃に強い	・ 設置労力の負担が多 ・ 一度設置すると移動、撤収は難しい	・ 冬期も稼働が必要なりんごなどの果樹 ・ 地域ぐるみでの長距離の防護柵

※ 漏電対策のため、雪に埋まる電線は外すなどの対応が必要

注) 平地の場合、支柱の間隔を広げ支柱本数を減らせるため、恒久電気柵と簡易電気柵のコストは同程度。農地に凹凸がある場合は、支柱を追加し、ワイヤーの高さを一定に調整する。

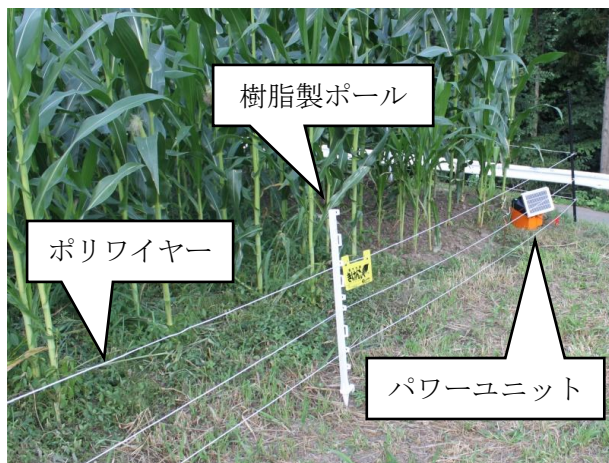


写真3 簡易電気柵



写真4 恒久電気柵

(3) 緊張具によるワイヤーの調整

- ・ 簡易電気柵、恒久電気柵ともに、ワイヤーに適切なテンション（張力）をかける必要があるため、緊張具を用いテンションを調整します（写真5、6）。
- ・ テンションがかかることで、物理的にも侵入が難しくなるとともに、野生獣がワイヤーに触れた際には、よりワイヤーに鼻などを圧着できるため電気柵の効果が高まると考えられます。
- ・ また、緊張具の使用により、角の支柱にはより大きな負担がかかるため、**太い支柱**を使う、または**補強**を入れる（写真7）などの対策をとります。



写真5 簡易電気柵の簡易緊張具

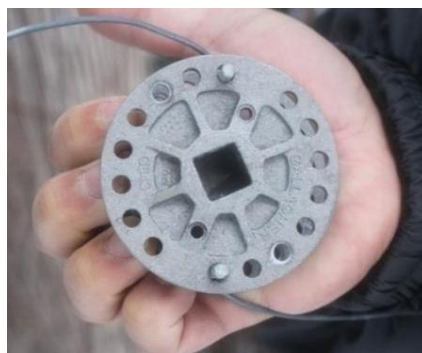


写真6 恒久電気柵の緊張具



写真7 角支柱の補強

3 野生獣の特徴と対策：イノシシ

(1) 被害の現状

- ・ イノシシによる農作物被害面積及び被害金額は、年度により増減がありますが、近年は、被害面積が50ha前後、被害金額が5千万円前後で推移しています（図4）。
- ・ 令和6年度の品目別の被害金額は、**稲、いも類、野菜の順**となっています（図5）。
- ・ シカ、クマなどと異なり、農作物の被害のほかに、農地の掘り起し、水田畦畔や水路を崩すなど、**農業基盤への被害も大きい**ことが問題となっています。



写真8 ほ場に侵入したイノシシ

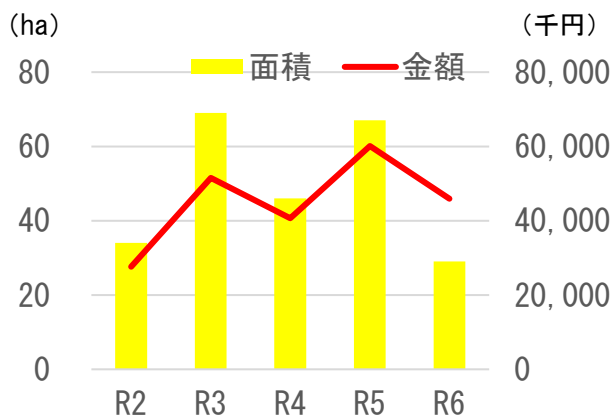


図4 イノシシによる被害面積及び金額の推移

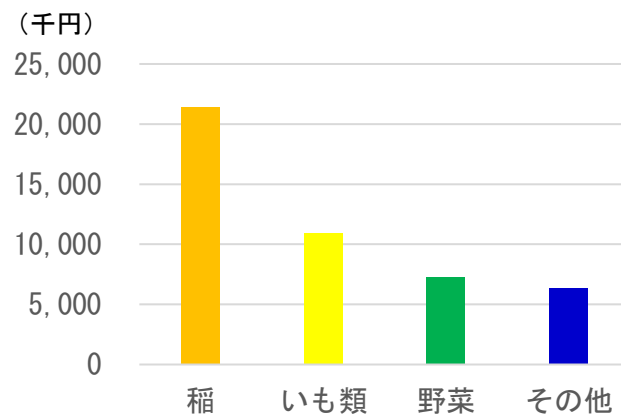


図5 イノシシによる上位3品目被害金額 (R6)

(2) 生態

食性	主に植物を中心とした雑食性。
繁殖	年1回、4～5頭出産。繁殖力が高い。 ただし、初期死亡率が高く、平均年齢は1歳前後。
群れ構成	血縁関係のある母系集団を形成。オス成獣は単独行動。
行動域	決まった行動域を持つ (約1km ² 程度)。縄張りは持たない。

(3) 対策

- シカなどと同様に、藪を刈り払うなどの「生息環境管理 (よせつけない)」を行うとともに、電気柵による「侵入防止対策 (まもる)」を行います。
- イノシシのみであれば、ワイヤーメッシュなどの物理柵でも防ぐことができますが、本県の場合はクマの侵入の可能性があるほか、防護設備の設置距離が長くなる作目が多いため、電気柵が有効です。
- 段数は、岩手県の場合はクマの侵入のリスクがあるため、「20、40、70 cm」の3段を基本とします (写真9、10)。
- 「捕獲 (とる)」の対策では成獣の捕獲が重要です。子どものウリボウを数頭捕獲したとしても、残った子どもが成獣となって加害するため、被害は減りません (写真8、11)。
- また、残ったイノシシはワナが危険であることを学習し、その後は捕獲が難しくなることがあるので注意が必要です。
- そのため、まずは警戒心が強いイノシシの特徴を考慮し、藪の刈り払いなどで見通しを良くするとともに、イノシシが侵入しないよう、農作物を電気柵でしっかり囲うことが重要です。



写真9 子実用とうもろこしに設置された3段の簡易電気柵

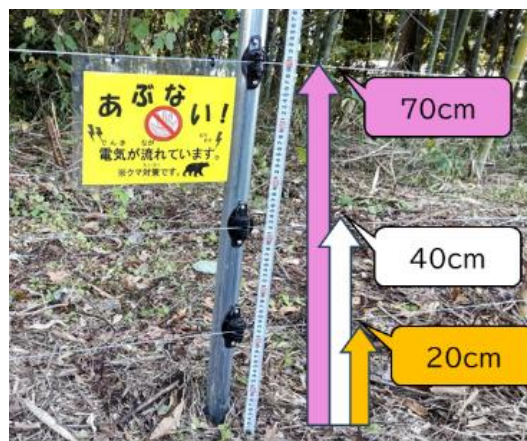


写真10 クマ・イノシシ用の電気柵「20、40、70 cm」の3段



写真 11 イノシシによる子実用とうもろこしの被害（電気柵未設置）

ツキノワグマの出没に関する警報

県は、ツキノワグマの出没に関する一層の注意を促し、更なる被害の防止を図るため、県内全域に「ツキノワグマの出没に関する警報」を発表します。県民の皆さんにはツキノワグマの被害を防止するため、一層の注意をお願いします。

<https://www.pref.iwate.jp/kurashikankyou/shizen/yasei/1049881/1043255.html>

- 1 クマに遭遇しないために
 - ・ 事前に入山地域の出没情報や被害情報を確認する。
 - ・ 音の鳴るグッズを常に鳴らして存在をアピールする。
- 2 クマを寄せ付けない
 - ・ 食べ残し等、エサになるものを放置しない
 - ・ 農地周辺のやぶを刈り払い、見通しの良い環境を整備する。
- 3 出会ったときの行動
 - ・ 背を向けて走って逃げない
 - ・ 目を離さず静かにゆっくり後ずさる
- 4 襲われそうになったら...
 - ・ クマが攻撃してきたら両腕で顔や頭をカバーし地面に伏せて防御する

次号は8月27日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づき作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用ください。

熱中症防止

- 日中の気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等作業時間の工夫を行うこと。水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給すること。気温が著しく高くなりやすいハウス等の施設内での作業中については、特に注意。
- 帽子の着用や、汗を発散しやすい服装をすること。作業場所には日よけを設ける等できるだけ日陰で作業するように努めること。
- 暑い環境で体調不良の症状がみられたら、すぐに作業を中断するとともに、涼しい環境へ避難し、水分や塩分を補給すること。意識がない場合や自力で水が飲めない場合、応急処置を行っても良くならない場合は、直ちに病院で手当を受けること。

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。